

今週のみことば

「神の業がこの人に現れるため」

(列王記第二 6 章 8 節～17 節)

「…エリシャは祈って主に願った。『どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにしてください。』主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」(6:17)

(ヨハネの福音書 9 章 1 節～41 節)

「イエスは答えられた。『この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。』」(9:3)

今日のメッセージ要旨

◎私たちは目先のことに囚われ、因果応報の考え方に支配されて不安に陥り、肝心かなめのものを見失なっていることが多々あります。その解決策は？

◎列王記第二 6 章 8 節以下の重点は「若い預言書の目が開かれる」です。どんなに周囲が騒ぎ立て、危険が迫っていても、エリシャは天上の幻を見て平静な心を与えられ、その祈りにより若い預言書の目が開かれ、「私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多い」(16) ことがわかったのです。

イスラエルにとって北のアラムは脅威だったが、主の御手が何度も国を守った。エリシャがアラム軍の所在を一度ならず告げたので、王ヨラムはその都度そこを警戒した(8-10)。アラムの王はエリシャがいる町を突き止め大軍を送るが、主は祈りに答え、エリシャも町も守られたのです(18-23)。

◎ヨハネの福音書 9 章は「安息日に生まれつきの盲人を癒す」記事です。

生まれつき盲人である人を見て弟子たちはイエスに質問をしました。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか」。これは因果応報の思想です。旧約聖書を見ると苦難について三つの見解があります。①罪の結果としての苦難、②訓練としての苦難(ヨブ)、③他人の身代わりとしての苦難(メシヤ)です。人間は何か問題が起こると「罰が当たった」と言ってすぐに因果応報の考え方で物事を見てしまいがちです。ユダヤ教では伝統的に災いや身体に障害を生ずるのは「罪の結果」と考えられていました。弟子たちも、パリサイ人たちも(34)同様に考えていたのです。しかし、イエス・キリストは「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです」と語られたのです。これは驚くべき宣言であって、肉体のハンディキャップは「神のみ業の現れるため」であるとの積極的な新しい光が与えられたのです。「そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」(イザヤ35:5,6)との預言がイエスにおいて成就したのです。

この男性は「シロアムの池」で癒されました。主イエスこそ真の「シロアムの池(遣わされた者)」であられます。この癒された人はパリサイ人に追求され、宮から追い出されましたが、イエスご自身がこの人に会って下さり、「主よ。私は信じます」との信仰告白に導かれ、真の礼拝者と変えられたのです。正に神のみ業です。なお聖書において「癒し」とは病が癒されることだけでなく、どんな病の中におかれても勝利を与えられることをも意味しているのです。すべてのことを通して「主よ、信じます」との告白し、主を崇めていきましょう。